

「まず自分はもう一週間で、もう体が思うように動かないというか。もう疲れがすごくて。これたぶん一年続けたら絶対持たないな、っていうのを実習で感じたということは、本当に教師になったら、それ以上の仕事を、ほかの先生、例えば実習担当の先生だったら、それに加えて、学校の業務というか、そういうものも加えてやってるっていうことを考えると、これを一年持つことは絶対に自分には無理だっていうのを感じたっていうのが一番です。」

これは誇張でない。いま少し具体的に生々しく、Iは一日の実習スケジュールを紹介してくれている（体力的にも無理だと考えて、就活を始めたようである）。

「自分がまず朝の5時半に起きて。7時には、7時過ぎぐらいに学校、7時半ぐらい学校に行って、そこからずっと子どもがいる状態で、1・2・3・4（時限と）授業を受けた（行った）後に昼ごはんも子どもたちと食べて、昼も子どもと遊んで、5・6（時限）の授業を受けた（行った）後に先生と話し合い、一日の反省だったりとかの話し合いがありました。ほかの他教科の、専科の先生との話し合いも含めて7時まで協議会などがありました。で、それからまあ帰ってご飯食べてお風呂入ってなどして9時になった後、夜の2時とか3時ぐらいまで教材研究、それが終わってから寝るみたいな。」

同じく、最終的に公務員（警察官）を選択したJもまた、教育実習をきっかけにして教職とは違う職業を目指したという。

「教育実習が終わって、その、現場の感じを見て、自分にはちょっと向いてないかなって思いました。…（中略）…とりあえずやっぱり忙しそうで、先生方が。あと、やっぱ。なんかそのやりがいとかももちろん感じられたんですけど、授業準備だったりやるのがいっぱいありすぎて、大変だなって思いました。」

海外留学を決めたOは、教育実習生を見ながら、自らも陥るかもしれない危険性を客観視することになったようである。

「…私は多分働くことにすごく向いているけど、きっと自分の中で線引きができなくなって、永遠に教育、教職の、何て言うんでしょう、お仕事にもう全力投球してしまいそうで、それはとてもいいことなのかもしれないけれど、うまく言えば日本の中の今の、よくできている、あのブラックって言われるぐらいの教育環境の中でも、お仕事の環境でも、これはのめりこむな、っていう、ちょっとその危険性を客観視できたというか、それが一番強いかなと思います。」